

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Feelings about pregnancy and mother–infant bonding as predictors of persistent psychological distress in the perinatal period: the Japan Environment and Children’s Study

和文タイトル:

出産前後の心理的ストレス持続の予測因子としての妊娠に対する気持ちと産後の対児愛着について:子どもの健康と環境に関する全国調査(JECS)

ユニットセンター(UC)等名: 兵庫ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Journal of Psychiatric Research

年: 2021 DOI: 10.1016/j.jpsychires.2021.05.056

筆頭著者名: 徳田 成美

所属 UC 名: 兵庫ユニットセンター

目的:

母親の心理的ストレスには妊娠に対する気持ちに関連し、予期しない妊娠はストレスを持続させる可能性が高いとされているが、産後の対児愛着との関連は明らかではない。本研究では、妊娠に対する気持ちと産後の対児愛着が、出産前後の母親の心理的ストレスの持続に与える影響を明らかにすることを目的とした。

方法:

JECS に登録された 97,415 人の妊婦のうち、妊娠初期に心理的ストレスを感じていた 24,324 人を対象とした。妊娠に対する気持ちは妊娠初期に、ストレスは K6(うつと不安の程度の評価指標)を用いて妊娠初期および産後 12 か月に、対児愛着は日本語版 MIBS-J(日本語版赤ちゃんへの気持ち質問票)を用いて、産後 1 か月と 6 か月では 5 項目、産後 12 か月では 10 項目について評価した。

結果:

妊娠に対する気持ちが「とても嬉しかった」人に比べて「予想外だった」や「困った」と答えた人の方が、産後 12 か月までのストレスの持続への影響が大きかった。対児愛着についても、生まれた子どもに対して肯定的な気持ちの人と比べて否定的な気持ちの人の方が、ストレスが持続しやすい傾向が見られた。ただし、妊娠中から産後 12 か月までのストレスの持続は、妊娠に対する気持ちから受ける影響よりも対児愛着から受ける影響の方が大きく、妊娠に対する気持ちは産後の対児愛着を介して間接的にストレスの持続に影響を与えていた。

考察(研究の限界を含める):

妊娠に対する否定的な気持ちは出産前後のストレスの持続に影響し、それは産後の対児愛着を介して間接的に影響を与えていることが明らかとなった。対児愛着は妊娠中から形成されるため、妊娠中にストレスを感じている母親については、妊娠中から対児愛着が良好となるように支援を行うことで、ストレスの持続を防ぐ可能性がある。本研究の限界として、対児愛着の測定に用いた日本語版 MIBS-J が産後 1 か月・6 か月では 5 項目しか用いていないこと、産後 12 か月ではストレスと対児愛着について同時期に測定されていること、妊娠中の対児愛着が調査されていないこと、子どもの健康状態などの要因が考慮されていないこと等があげられる。

結論:

母親の出産前後の持続的なストレスには、妊娠に対する否定的な気持ちと産後の否定的な対児愛着が関連していた。妊娠に対する気持ちは、対児愛着を通して間接的にストレスの持続に影響を与える可能性があるため、妊娠中から対児愛着が良好になるような支援を行うことが必要であると考えられた。